

— 私の文学館散歩（八） —

## 乱歩に導かれた、懐かしい時代への散歩

— または、いかにして私は、明智小五郎になったか —

松村 茂治

### 乱歩を読めと言う声が・・・

最初にその声を聞いたように思ったのは、白金にある大  
学に勤務するようになって間もなくのことである。昼食を  
取るうとしてたまたま通りかかった消防署の屋上に聳える  
高樓を見上げたとき、昔どこかで見たことがあるような気  
がしたのだが、そのとき真っ先に連想したのは、少年探偵  
団が活躍した映画だった。怪人二十面相がアジトにして  
いたのはこのような建物だったのではなかったか、あるいは  
彼が警官隊に追い詰められ、姿を消したのはこのような塔

ではなかったかと思ったのである。  
それから十年ほど経って、前回の散歩で久し振りにこの  
塔を見上げたとき、改めて、乱歩を読むように言われてい  
るような気がしたのだった。

昭和のはじめに建てられた高輪消防署二本榎木出張所の  
円筒形のこの望楼は、東京都選定歴的建造物というだけあ  
って、歴史を感じさせることはもちろんだが、おとぎ話に  
でも出て来そうなその造りが何とも印象的である。

望楼の頭頂部に電波塔のような鉄塔があるが、これは昭

和五十九年の竣工というから、私が見たような気がした建  
物には、この電波塔はなかったことになる。なぜなら、少  
年探偵団が活躍したのは昭和三十年代のことだったからで  
ある。

映画のロケでこの消防署の塔が使われたのかどうか、使  
われたとすればどの作品だったのかはつきりしないうちに、  
もう一度、乱歩を読めという声を聞いたような気がしたの  
だった。真夜中に目覚めてスイッチを入れたラジオから、  
懐かしい名前が聞こえてきたのである。それは、明智小五  
郎でも怪人二十面相でもなく、「上田みゆきさん・・・」  
という、問いかけだった。

上田みゆきと言われて、ピンと来る人がどれほどいるだ  
ろう。彼女は子ども頃の頃、松島トモ子と並ぶアイドル  
だった・・・ああ、松島トモ子と言われても、理解の助け  
にはならないか・・・彼女は、今では、上田みゆきという  
名前より「宇宙戦艦大和」をはじめ、数々のアニメソング  
を歌ってきた佐々木いさお夫人と言った方が通りは良いの  
かもしれない。

小学生の頃、上田みゆきが主役を演じていた「ポッポ  
ちゃん」というラジオドラマをほぼ毎日聞くことになった。  
特にこの番組の熱心なファンだったからという訳ではなく、  
目当ては、「ポッポちゃん」に続いて放送されていた「少

年探偵団」の方にあり、これを聞くために少し前から、ラ  
ジオのスイッチを入れておかなければならなかったのでは  
ある。

後に、上田みゆきは、テレビの「少年探偵団」にも出演  
していたというのだが、私は、テレビで「少年探偵団」を  
見たという記憶はない。ラジオ放送ほど熱心ではなかった  
ということかもしれないし、テレビ放映までに、私が探偵  
団を卒業してしまっただけかもしれない。いや、単に家にま  
だテレビがなかったのかもしれない。

ともかく、上田みゆきが探偵団に出演していたかどうか  
は関係なく、「ポッポちゃん」と「少年探偵団」は、私に  
とっては同じ時代、同じ世界での出来事だったのである。

学校から帰れば、塾も習い事もなく、外で好き勝手な遊  
びができた。当時、私が住んでいたのは、東京都とはいえ  
都内ではなく、都下と言われた府中市の外れ、家のすぐ裏  
には養蚕のための広大な桑畑が拡がり、その先には砂利穴  
があり、家から五分も歩けば多摩川の河原に出ることが出  
来ような所で、毎日、野原を駆け回って遊んでいたのだ  
ある。桑畑の桑の枝は、チャンバラ用の刀にするにはお  
逃え向きの木だったし、河原のスキに囲まれた窪地にス  
スキ葺きの（？）隠れ家を作ったこともある。河原に出る  
途中にあった大きなお屋敷を取り囲むサワラの枝の上にも、

誰にも見つからない秘密基地を作った。そこから枝を伝って、ずっと先まで、一度も地面に下りずに進むのは、まるで忍者になったような気分だった。

当時、はつきりとした門限はなかったが、どこの家でも、暗くなる前に帰ってくるというのが暗黙の取り決めになっていたのではなかったろうか。もちろん、「こんな暗くなるまで、どこで遊んでいたの！」と叱られることはいつものことではあったが・・・。

夕食にはまだ少し間のある時間帯だった。「ポップチャン」が終わると、あの主題歌とともに、少年探偵団が始まったのである。探偵団にどれくらいはまっていたかというところ、どうしたら、将来、明智小五郎のような私立探偵になれるのだろうかと友人と真剣に語り合うほどだったのである。こんな風に、少年探偵団にまつわる出来ごとが続くかなかし振りに立ち寄った本屋で、またまたあの声を聞くことになった。平積みにされた文庫本の中に、五巻もの岩波文庫版の乱歩作品集を見つけたからである。

十年ほど前、岩波文庫に、乱歩の「少年探偵団」物ではない短編集が一冊入っていることに気づいていて、それだけでも大きな驚きだったが、「怪人二十面相」や「少年探偵団」を含めて五冊もの乱歩作品集が刊行されていることを知り、これはどうしたことだろう、乱歩が古典になった

ということなのだろうか、それとも単に岩波の台所事情によるものなのだろうかなどと余計な心配をしたが、そんなことよりも、全五巻というのは、読むには手頃な分量なので、久し振りに乱歩に目を通してみようと思っただのである。ほとんどが、一度は読んだはずの作品なのにも拘わらず、どれもはじめて読むように新鮮で、時の流れを・・・いや、記憶力の減退が身にしてみるのである。

### 乱歩体験

江戸川乱歩を知ったのは、我が国の多くの少年たちと同様、小学生の頃に読んだ「少年探偵団」シリーズを通してである。ラジオ放送とほぼ同じ時期のことで、この頃は、乱歩に、いわゆる大人向けの作品があることは知らず、探偵団シリーズの何冊かを読んで終わっている。

次に乱歩を手にとったのは、大学生になってからである。手元にある「江戸川乱歩傑作選」（新潮文庫・昭和四十二年 八刷）のカバーには、一九六八年（昭和四十三年）購入のメモがある。四十三年ということは、私が大学三年のときである。「二銭銅貨」「心理試験」「D坂の殺人事件」などの作品に触れ、乱歩の神髄は少年探偵団ではなく、こうした本格推理物にあることを知ったのだった。

この「傑作選」を手にした翌年、講談社から「江戸川乱

歩全集」（全十二巻）が刊行され始める。全巻揃えたという記憶はないが、手元にあるのが第一巻「屋根裏の散歩者」と第二巻「パノラマ島奇譚」の二冊だけというのは、意外だった。おそらく、月毎の配本にこちらの読書のペースが追いつかず、いや、それだけではなく、一冊六百九十円の出費が痛くて、第二回配本まででギブアップしてしまったものと思われる。ただし、「陰獣」や「押し絵と旅する男」も、この頃読んでいたので、第三巻、第四巻も持っていたのではなかったかとも思うのだが、あるいは、それらは別のアンソロジーで読んだのかもしれない。

久し振りに、この講談社版全集を開いて、第一巻の挿絵が横尾忠則、第二巻が古澤岩美の手になるものだということをすっかり忘れていたことに思い至った。編集委員に松本清張、三島由紀夫、中島河太郎が名を連ねていることもすっかり失念していた。本人たちがどれほどコミットしたかは分からないが、三島は、「黒蜥蜴」を戯曲化して舞台にかけているので（女賊・黒蜥蜴は美輪（丸山）明宏、明智小五郎は天地茂が演じている）、案外本気だったのかもしれない。また、第二巻の解説を澁澤龍彦が務めていて、この全集の刊行に込める出版社の並々ならぬ思いを想像するとともに、全巻を揃えなかったことが改めて悔やまれるのである。

手元にあるこれら二巻の目次と挿絵を見るだけで、猟奇的、官能的と言われるこうした作品群こそ、乱歩の真骨頂だった、いや、私自身、こういう傾向の作品が好きだった、いやいや、今でも好きだと思うのである。「闇に蠢く」に挿入された、こちらに背中を向けて横たわる裸の女性を描いた横尾忠則のイラスト、白い肌の背後に迫る刃物や裸女の群舞など第二巻に挿入された古澤岩美の挿し絵など、「少年探偵団」からは思いも及ばぬ世界が展開されている。少年探偵団に親しんでいた頃、誰がどこで仕入れてきた話か覚えていないが、私たちが子どもたちの間で、「乱歩は、真夜中に、ドゾウの中で、ローソクに火を灯して書いているんだって・・・」といったウワサが広まっていた。今回、この講談社版全集の月報に、推理作家の高木彬光が「・・・深夜の土蔵の中で蠟燭をともし、その光で執筆しているという伝説的なゴシップ・・・」と書いているのを見つけ、子どもの頃、私たちが聞いていたのと、同じネタだと思っただ次第である。

### 塔をめぐる二つの作品

乱歩に導かれた散歩は、高輪の消防署の火の見櫓から始まったのだった。この火の見櫓が、乱歩の作品で利用されたとすれば、どの作品なのか、はつきりさせたいと思ひ、

乱歩の作品で塔をモチーフにした作品を探してみると、「少年探偵・江戸川乱歩全集」（ポプラ社 一九六四年発行）の奥付裏の当該全集一覽に、「鉄塔王国の恐怖」「塔上の奇術師」「時計塔の秘密」の三作が載っている。まずはこれらから当たってみることにした。ただし、現在流布しているシリーズには、「時計塔の秘密」は含まれていない（ただし、「塔状の奇術師」の中の一章が「時計塔の秘密」となっている）、そのことと関係があるのかも（しれない）。

入手可能な二作品のうち、先に読んだのは、「鉄塔王国の恐怖」（昭和二十九年作）である。「鉄塔」を題名にもつ作品としては、「鉄塔の怪人」が記憶に残るが（映画化されたときのタイトルも「鉄塔の怪人」だった）、全集に収録されたときに「鉄塔王国の恐怖」に変更されたようだ。結論から言うと、この作品の映画化の舞台としては、高輪の櫓は適当ではないように思われた。鉄塔と言えば、発電所や変電所を結ぶ高圧線の鉄塔やテレビやラジオ用の電波塔を思い浮かべるのが普通であろう。その代表的な姿が東京タワーでありエッフェル塔である。しかしながら、作品の鉄塔は様子が違う。二十面相にとらえられた少年たちが登らされた鉄塔について、こんな描写がある。

「さあ、これをのぼるんだ。」

二十面相のさしずで、ふたりのあらくれ男は二少年をおいたてて、そのはしごをのぼりました。二階、三階、四階、みんなまるい鉄の部屋です。そして五つめのはしごをのぼると、パッとあたりが明るくなって、鉄塔の屋上にでました。（鉄塔王国の恐怖 169頁）

この形は、東京タワーやエッフェル塔より、西洋のお城に聳えている尖塔のように見える。作品の中でも、冒頭で「その深い森の中に、黒い建物が立っています。西洋のお城のような、まるい塔のある建物です。それがぜんぶ鉄できていくようにまっ黒なのです。」（8頁）と記されている。

まるい塔状の建物ということなので、鉄塔というより、身近な建造物でいえば、灯台に似ているような気がする。もしそうなら、形としては東京タワーよりも、高輪の塔に近いには思う。しかし、鉄で出来たまっ黒な建物ということになると高輪の塔とは随分と違ってくるし、そもそも鉄塔王国は木曾の山中にあるという設定で、映画なら、都会の建物を山の中にあるように見せかけることは可能だろうが、子ども向けの映画で、そこまでの編集をするものだろうかと思うのである。

今回、この作品について調べていて、思わぬ発見があった。

「鉄塔の怪人」は一九五七年（昭和三十三年）に、明智小五郎を岡田英次が演じて映画化されているが、敵役の二十面相を演じたのが、何と若き日の加藤嘉だった。岡田英次は、日本を代表する二枚目俳優の一人で、私は学生時代に、アラン・レネ監督による「二十四時間の情事」（原題は、Hiroshima Mon amour・・・広島 我が愛）に出演しているのを観た覚えがあるが、そのことよりも、加藤嘉が二十面相を演じていたというのは意外だった。

私知っている加藤嘉は、いわゆる老け役を演じるようになってからのことで、最も印象に残っているのは、野村芳太郎監督によって映画化された「砂の器」（原作 松本清張）での老人役（加藤剛が演じた主人公・和賀英良の父親役）である。あれは昭和の初め頃の舞台設定だったろうか、差別・偏見の対象だった病に冒され、故郷を追われ、まだ幼かった主人公を連れて、遍路姿で日本中を放浪したあの老人が、若い頃に怪人二十面相を演じていたのである。もちろん、役者だから、依頼があれば演じるのは当然とは思うものの、怪人二十面相と和賀英良の父親では、ギャップがあり過ぎる。

余計なことだが、ポスターに掲載されている岡田英次の

表情は、私の記憶にある岡田英次とあまり変わらない。しかしながら、加藤嘉の表情は、老け役の時代の表情とはかけ離れた、かなり精悍で強面の表情に撮られている。もちろん、悪漢を演じているので優しい穏やかな表情では説得力がなくなるので、当然と言えば当然である。一瞬、誰かに似ている・・・そうだ、宇崎竜童・・・と思ったのだった・・・いやいや、宇崎竜童が悪漢だと言うのではなくて、・・・つ、つまり、彼は年を重ねるとあの加藤嘉のような表情になるのではないかと・・・

続いて手にした「塔上の奇術師」（昭和三十三年作）も、

結論から言えば、高輪の塔を利用するのは無理と思った。本のカバーには、大きな時計台が画かれており、目次を見ると、冒頭の章は「不思議な時計塔」となっているからだ。そもそも、時計塔だろうと火の見櫓だろうと、「塔上の奇術師」は映画化されてはいないようなので、私が映画で見たと思っっているのは、この作品でないことは明らかである。しかしながら、「鉄塔王国」の舞台が木曾の山中だったのに対して、「塔上の奇術師」の舞台は都内、しかも、何度か行ったことのある場所であり、現在も知り合いが何人か住んでいるということでもあるので、読んでみようと思っ

たのである。

舞台となる時計塔がある都内某所については、作品の冒頭で以下のように描かれている。

畑があったり、林があったり、青い草でふちどられた小川が流れていたたり、その上にむかしふうの土橋がかかっていたりして、まるで、いなかのようなけしきですが、ここはいなかではなく、東京都世田谷区のはずれなのです。(塔上の奇術師 6頁)

世田谷区民にしてみたら、面白くない紹介のされ方かもしれないが、昭和三十年頃は、都心を少し離ればどこもこんな感じだったのでなかるうか。乱歩は、彼自身が世田谷に関わりがあったからか、二十面相や探偵団を登場させるのに都合が良かったからか、他の作品でも世田谷を利用している。例えば、「少年探偵団」(昭和十二年作)では、「桂君のお家は世田谷区の玉川電車の沿線にあつて(中略)自分が探偵団に入っただけでなく、やはり玉川電車の沿線にお家のある、級友の篠崎君を誘って、二人で仲間入りをしたのです。」(16頁)とある。また、「青銅の魔人」(昭和二十四年作)では、「東京都内ではありませんが、多摩川上流のさびしい畑の中に、林にかこまれた、

ちよつとした丘があつて、その上に奇妙な時計塔がそびえています。」(245頁)とあり、世田谷とは明記されてはいないが、時計塔まで含め、「塔上の奇術師」とよく似た設定になっている(執筆年代から言う、「青銅の魔人」が先で、「塔上の奇術師」でそれを再利用したと言うべきであらう)。

今では都内・都下といった言い方はあまりしないが、昔、都内と言えば二十三区のこと、その西の端が世田谷区、その西隣の調布市は最早都内ではなく、都下北多摩郡と呼ばれていた。だから、都内にあつて多摩川上流の寂しい所と言えば、それは世田谷区ということになるのである。

玉川電車は、通称、玉電と呼ばれて親しまれた東急の路線で、渋谷駅と二子玉川園駅を結んでいた。合点がいかないのは、東京を奥多摩から東京湾へ東西に貫いて流れているのを多摩川と表記するのに、電車は玉川となつてるところである。世田谷のこの辺りを玉川と書き表すのは、昔玉川村と呼ばれていたことの名残だと思うが、なぜ敢えて玉の文字を使ったのだろう。江戸の町に水を供給したのを「玉川上水」と表記するので、多摩でも玉でも、どちらでもかまわないということなのかもしれない。

しかしながら、私は、小学校の頃、作文で多摩川を玉川

と書いて、先生から注意をされた経験がある。校歌に「鮎の子はしる多摩の川・・・」という歌詞のある小学校に通っていたときのことなので、当然のことかもしれない。以来、タマ川は多摩川でなければ落ち着かないのである。

そもそも、玉川電車は、多摩川で取れる砂利を運搬するために敷設されたというのだから、個人的には、もっと多摩川に敬意を表しても良かったのではないかと思う。現在、多摩川を見下ろすように建っているデパートにも玉川の修飾語がついている。

話は戻るが、調べてみると、玉電は渋谷―二子玉川園間のみではなく、三間茶屋と下高井戸(京王線)を結ぶ現在の東急世田谷線も玉電と呼ばれていたようなので、桂君たちの家が、どちらの路線上にあつたのか、作品からでは分からない。

脱線するが(と言っても玉電のことではない、私の話のことである)、渋谷―二子玉川園間の玉電は一九六九年(昭和四十四年)に廃線となり、その後を、田園都市線がカバーする形になっている。玉電で使われていた車輛が、つい最近まで渋谷駅前に、ハチ公と並んで展示されていたが、現在は何処かへ移転されたとのことである。

また、二〇年ほど前、東急多摩川線なる路線が運行を開始しているのを知った。これは、蒲田駅(JR京浜東北線・

東急池上線)と多摩川駅(東急東横線)を結ぶ路線ということ、玉川電車とは無関係のようだが、多摩川駅から多摩川を上流へ向けて橋一つ上つた所に二子玉川駅があるので、何とも紛らわしい。しかも、多摩川線には、中央線の武蔵境駅から多磨霊園の脇を通り多摩川にほど近い府中市・是政まで行っている西武多摩川線もあり、鉄道マニアではない私としては、タマガワセン・タマガワエキと言われると混乱するばかりなのである。

脱線を早く復旧させよう。

「塔上の奇術師」を読み進むと、間もなく誘拐事件が起きるのだが、それは、新宿から京王線で十分ほど西に下つた千歳烏山駅でのことである。二十面相のアジトも、事件の被害者たちの住まいも、概ね世田谷区千歳烏山近辺にあるという設定である。作品を読みながら、私は、蘆花恒春園あたりの風景を想像していた。

今、「二十面相」のアジトと書いたが、この作品では二十面相は「四十面相」にグレードアップして登場してくる。顔の数が二十では足りなくなったからだろうと想像するが、なぜ三十でも五十でもなく、四十だったのかは分からない。私が小学生の頃、すでに「怪奇四十面相」という作品があつたのは覚えている。その頃から、私は「カイキョンジュ

ウメンソウ」と読んでいたが、「塔上の奇術師」の中で、四十面相本人が「ぼくはね、カイジン、シジュウメンソウです」と名乗っているので、「ヨンジュウ」ではなく「シジュウ」が正確な読み方だということを、六十年ぶりに知った次第である。

事件のあったとされる千歳烏山駅について、文庫本の解説には、昭和三十六年頃の千歳烏山駅と同駅に停車中の京王線の写真が、「渋谷一郎青年がつけさられたという千歳烏山駅前」のキャプション入りで掲載されている。

ホームの屋根から吊り下げられている案内表示板には、やや不鮮明ながら、「明大前 新宿 方面（あと二つ書かれていたうちの一つは、下高井戸かもしれない）のりば」と書かれているように見えるので、停車中の電車は新宿行きの上り電車ということになる。

千歳烏山駅の写真はモノクロだが、停車している車輛の実際の色は緑である。現在、京王線はクリーム色ないしはステンレスの無塗装車体が主だが、ときどき緑色の車輛を見かけることがある。十年ほど前、仕事帰りの新宿駅でこの色の車輛を見たとき、一瞬、昭和の時代にタイムスリップしたかのような感じがしたのだ。ただし、現在の緑色が明るい若竹色なのに対し、昔私たちが乗ったのはもう少しくすんだ、どちらかというと深緑に近い緑色だった。

十二、三歳のかわいらしい小学生が、麻布の六本木に近い、さびしい屋敷町を、ただひとり、口笛を吹きながら歩いていました。（中略）

その町は今まで通ったことがなく、その洋館もはじめて見たのですが、これが今の東京にある建物かしらと思われるような、ひどく古めかしい、なんだか一世紀もむかしの西洋の物語にでも出てくるような洋館でした。

ずっと赤れんが塀がつづき、その中ほどのこけのはえた石の門に、唐草もようになった鉄のとびらがしまっています。（妖怪博士 7-10頁）

麻布区の、とある屋敷町に、百メートル四方もあるような大邸宅があります。四メートル位もありそうな、高い高いコンクリート塀が、ズーツと目もはるかに続いています。いかめしい鉄の扉の門を入ると、大きな蘇鉄が、どっかりと植わっていて、その茂った葉の向こうに、立派な玄関が見えています。（怪人二十面相 11頁）

赤れんが塀は空襲による破壊を受けておらず、石の門は苔むしていることから、その古さが分かる。一片が百メートルもある大邸宅に人の背丈の倍以上もあるコンクリート塀・・・よき時代の山の手の風景なのだろう。

写真の車輛には二〇〇〇番代の車輛番号が読み取れる。手元にある「京王線の電車・バス100年のあゆみ」という記念誌によれば、二〇〇〇系の車輛は昭和三十年前後に登場し、五十年代まで走っていたということなので、写真に写っている車輛には、小・中学生時代の私の足跡や指紋が残っていたのかもしれない。

私は小学校に上がる前は調布、その後大学時代までは府中と、ずっと京王線沿線で過ごして来た。現在の住まいのある橋本に来た当初、京王線はまだ来ていなかったが、十年ほどして多摩ニュータウンの方から橋本まで線路が延びてきて、再びその利用者となった。子どもの頃からずっと利用してきた電車ということで、私にとって、私鉄と言ったら京王線ということになるのである。

ああ、脱線の復旧をしたつもりが、知らぬ目にまた線路を外れてしまったようだ。

### 昭和の風景

初期の少年探偵物、たとえば「怪人二十面相」「少年探偵団」「妖怪博士」などは、昭和十年代の作なので、戦争の被害を受けていない、大正時代につながる、古き良き時代の東京が描かれているように思う。

同じ都内でも、私は、夜の銀座の描写が好きである。

ひるまは電車やバスや自動車が、縦横にはせちがう大通りも、まるでいなかの原っぱのようにさびしいのです。月の光に、四本の電車のレールがキラキラ光っているばかり、動くものは何もありません。東京中の人が死にたえてしまったようなさびしさです。（青銅の魔人 229頁）

真夜中の二時頃ですから、銀座にはまったく人通りがありません。電車の通らないレールばかりが銀色にひかっつて、どこまでもつづいています。あの人通りのおおい銀座が、夜中にはこんなにもさびしくなるのかと、おどろくほどです。昼間、にぎやかなだけに、夜のさびしさはこわいようでした。（鉄塔王国の恐怖 17頁）

前者は昭和二十四年、後者は二十九年の作である。都心ということもあって復興が急ピッチで進んだものと思われる。戦争・焼け跡を感じさせる物は何もない。

先にも記したように、私は東京の郊外で育ったので、乱歩の描くような銀座はほとんど知らない。しかし、銀座が、彼の描くような佇まいだったとしたら、それは何と魅力的

な街かと思う。少なくとも、夜中になると人っ子一人いなくなるとは、昭和二十年代の東京の人たちは、随分と健全な生活を営んでいたものだと思う。そして、このような佇まいの街は必ずや夜霧に濡れるだろうし、こうした街に降る雨は、常にそぼ降る雨になるものなのだ。

同じ都内でも、少し都心を離れると、例えば、八王子街道（現在の甲州街道）を新宿から西へ少し下った所にある「常楽寺」（実際には、この辺りにこの名前の寺は見当たらない）周辺の描写になると、戦後・焼け跡の臭いがむんむんとする。

常楽寺うらの、草ぼうぼうのおばけ屋敷の、こわれたコンクリートべいのそばを、酒屋のご用聞きといったかつこうの、三十ぐらいの男が、あたりをキョロキョロ見まわしながら歩いていました。（中略）歯がかけたように、こわれているコンクリートべい。ひざまでかくれるような草むら。うしろのほうには、常楽寺の墓場が、うす暗い木立の中にチラチラと見えています。あたりはションとしずまりかえって、人っ子ひとり通りません。

（中略）へいぎわの、ずっとむこうの草むらの中に、なんだか黒いものがうごめいていました。草のあいだから

先の常楽寺裏とよく似た風景だが、こちらは港区内の原っぱの様子で、二十四年年の作ということだから、焼け跡からまだ煙が上がっているような印象さえ受ける。

煙突と言えば、子どもの頃、都内にあった母の実家に行くと、遠くに「おばけ煙突」を見ることが出来た。あれはどこにあつた、何の工場の煙突だったのだろう。それにしても、おばけとは、良く名づけたものだ。見る場所によつて、四、五本見えるときもあれば、二本になったり、一本になったりするのだった。いつの間にか、それは見えなくなつた。煙突自体がなくなつたからなのか、高層ビルで視界が遮られるようになったからか、分からない。

「鉄塔王国」では、「こじき」がごく自然に現れてくること、つまりそうした存在を誰も不思議に思わないということに驚かされたが、「青銅の魔人」では、もう一つの戦後の名残に驚かされることになった。

この作品では、小林芳雄少年が率いる少年探偵団をサポートするために、あらたな少年グループが組織されることになる。少年探偵団の隊員は良家の子どもでなければならぬという暗黙の（？）制約があつて、希望すれば誰でもなれるというものではない。また、団員になれたとしても、躰の厳しい家庭に育つ良い子たちは、夜間の「任務」に当

首だけ出してじつとそのほうを見ていると、やがて、それはふたりの人間であることがわかりました。じつにきたならしい姿をした人間です。ああ、わかりました。こじきです。こじきがこんなところにやすんでいたのです。ひとりは女こじき、ひとりはそのこどもでしょう。十四、五歳の汚い少年です。」（鉄塔王国の恐怖 113頁）

この作品は、昭和二十九年の作なので、世の中は戦後からは徐々に脱しつつある頃と言えらるが、壊れたコンクリート塀は空襲の名残であるうし、子連れの「女こじき」（今はこの言葉は使えない）は、戦争未亡人の一つの姿を言っているのだろう。

すこし行くと、焼けあとの広い原っぱに出了。こわれたコンクリート塀が、ところどころにのこつていたり、煉瓦のかたまりが、うす高くつんであつたりするほかは何もないさびしい所です。はるかむこうの方に、工場のあとにのこつたコンクリートの煙突だけが、空高くそびえているのが、かすかに見えています。（青銅の魔人 283頁）

たることはできないのである。そこで、小林少年がリクルート先を選んだのは、そうした制約を受けない浮浪少年たち（おそらくは戦争孤児）のグループだった。人呼んで、「少年探偵団チンピラ別働隊」という。

小林少年は、彼らを仲間に誘うためにこんな演説をぶつのである。

「諸君（中略）、諸君はけつして、カップライなんかやりたくてやっているんじゃない。しかたがないからやっているんだね。ね、そうだね。それはね、君たちには、おとうさんやおかあさんがいないからだ。やしなつてくれる人がないからだ。

だがね、それだからといって、こんなことをいつまでもつづけていちゃあ、ろくなもんにはならない。そこで、諸君にそうだんがあるんだよ。どうだい、みんな、僕たちのやっている少年探偵団のなかにならないか。

（中略）

ほんとうなら、僕たちの少年探偵団がやる仕事だけだ、なにしろこんどは相手が相手だし、夜中の仕事だからね。学校へ行っている団員たちにはやらせられないんだ。そういう危険なことをやらせてはいけないって、明智先生から、きびしくいつけられているんだよ。」

(青銅の魔人 276―277頁)

リクルートの対象となっているのは、「正規の」団員たちとほとんど年齢の変わらない少年たちである。しかしながら、夜間の危険な仕事は、翌日学校のある正規の団員たちにはさせられないが、学校のない身無し子たちなら、いだろうと、何とも身勝手な論理を展開し、挙げ句の果てに、「でもまだ本団員にはしないよ。君たちみたいなのをなかまに入れたら、ほかの団員がおこるからね・・・」(同 278―279頁)と、信じられないような堂々とした差別意識までひけらかすのである。

こうした「チンピラ集団」を利用する根拠について、乱歩は、シャーロック・ホームズを持ち出し、小林少年に「ホームズ先生が、やっぱり君たちみたいなチンピラやおとなの浮浪者を助手につかって、悪者をつかまえたことがあるのさ・・・」(同 279頁)と語らせている。

「別働隊」の活躍については原典にあたってもらうこととして、私はこの件を読んで、肝心の小林少年の出自はどうなっていたのか気になったのである。私が読んだ限りでは、彼の家庭環境についてはどこにも触れられていない。彼は第一作から登場するが、最初から明智探偵事務所の小林少年である。

の連絡に、長野の山中から伝書鳩を飛ばしている！)、二階の窓から望遠鏡で眺めていて発見した危険な兆候を直ちに電話で知らせたり(塔上の奇術師)、車を駆使して追跡したりするなどの展開(鉄塔王国の秘密)は、当時としては非日常的な光景である。この、日常と非日常の交錯するあたりに、当時の子どもたちは胸躍らせたのではなからうか。

時計塔の五階で、警官隊や小林少年に追いつめられた四十面相は、秘密の階段を使って下の階へ逃げ、さらに、隠し扉を通して地下道を抜けると、そこは屋敷の外の原っぱに通じている・・・

その地下道は、一方は金色の部屋のほうに通じ、もう一方は階段になって、地上への出口に通じているように思われましたので、みんなは、その階段をかけあがりました。

階段をあがりきると、頭の上に、ぽつかりと丸穴があらいていて、その外が、うす明るく見えるのです。

夜中ですが、地上は、地下道のように、まっ暗ではありません。みんな、その穴から、外に出ました。そこは時計屋敷の塀の外の原っぱでした。いちめんに草がはえて、ところどころに、せのひくい木のしげみがあります。

「少年探偵」シリーズでは、お金持ちの所有する宝石や美術品が二十面相に狙われるという設定がほとんどで、お金持ちの家には決まって「書生」が同居している。彼等は、将来を見込まれ、家の手伝いをしながら学校に通わせてもらっているという身分なので、ときには用心棒のような役割も演じなければならず、その結果二十面相にいじめられたりもする。小林少年は、中学生くらいの可愛い少年という設定だが、どの小林か、説明はない。他の団員たちは、学校に通っているようだが、小林少年は、学生服を着ているものの、学校に行っている様子はない。ひよつとすると、彼は明智家の「書生」で、もともと彼は自身が「チンピラ」だったのでないかと、今回、彼の演説を読んで思ったのである。

草むら、小川、原っぱ、おぼけ屋敷(のような建物)・・・というのは、当時の子どもたちにとっての格好の遊び場だった。どこの家も、木造平屋、トタン屋根の質素な佇まいで、どこまでが個人の敷地か、どこからが他人の土地か曖昧なことが多かった。そうした日常的なあいまいな土地の直ぐ脇にどっしりと構えている西洋館や時計塔は、非日常的な世界である。今や、小学生でもスマホを持つのは日常的な光景だが(ちなみに、小林少年は、明智小五郎へ

地下道の出入り口も、そういうしげみの中にかくされていたのです。(塔上の奇術師 166頁)

子どもたちにとっては、普段自分たちが遊んでいるような草むらの中に、二十面相のアジトへの通路が隠されているといったシチュエーションがたまらないのである。そういえば、あの月光仮面だって、その辺の草むらに隠してあったバイクに乗って「疾風はやてのように現れて 疾風のように去って」行ったのではなかったか。我々の秘密基地は、月光仮面や二十面相の隠れ家とつながっている・・・そういう時代だったのだ。

そういう時代に、私はある英雄とすれ違ったのである。いつものように、学校から帰って、近所の原っぱで遊んでいたときだった。後からやって来た友だちが、今日は、これから河原のヒューム管工場(コンクリート製の電柱のような形の長い管を作っている工場)で「七色仮面」の撮影があるから遊びは中止だと言うのである。なぜ彼が、そのような情報を得ていたのかは覚えていない。そんなことより、七色仮面を逃してはならないという思いの方が圧倒的に強かったのではないか。

駆け足で河原のヒューム管工場に着くと、すでに大勢の

見物人が集まっていた。

車（タクシーだったように記憶している）が急停車し、中から恰幅のいい紳士と若い女性が引きずり下ろされ、悪漢らしき男たちに脅されるというシーンのリハーサルが繰り返されていた。確かにテレビで見たことのある顔立ちで、紳士は私立探偵のカネアリ氏、女性は助手のサンコに間違いない。

私たちヤジ馬の目はもちろん、車の周りで演技をしている役者たちに集まっていたが、私は、カメラから離れて、工場の奥に積み上げられたヒューム管の山を上ったり下りたりしている人物がいたのに気づいていた。彼は、探偵と助手を乗せて来た車の運転手で、もう出番のない彼は、撮影が終わるまでそのようにして時間をつぶしているのだろうと思っていたが、それがとんでもない誤りであったことを、当該シーンのテレビ放映を見て思い知ったのである。

その日、撮影がどこまで進んだかは覚えていない。少なくとも、運転手がカメラの前に立つところは見てはいない。数週間して、私たちがヤジ馬として見守っていたヒューム管工場のシーンが放映されるのを見て目を疑ったのだった。あの日、カメラから離れて、ヒマを持ってあまっていたように見えていた運転手がクローズアップで登場したのである。しかも、運転手というのは、変装した仮の姿で、彼

は変装を解くために、被っていた帽子に手をかけ、それを顔の前に持って来てくしゃくしゃとやって顔の変装を取り除くと、帽子を投げ捨てたのである。現れたのはこのドラマの主人公・蘭光太郎だった。蘭光太郎と言っても誰も覚えていないだろうが、彼こそ、七色仮面の変身前の姿であり、演じていたのは、先般新型コロナウイルスの犠牲者となった、若き日の千葉真一だったのである。

大人になってから知ったことだが、彼は日本体育大学を出て、アクションスターへの道へ進んだということである。七色仮面は、彼のデビュー作ではなかったろうか。

今、ヒューム管の山を上ったり下りたりと記したが、そのやり方が一風変わっていた。彼は、横積みされたヒューム管の上を、普通に歩いて上るのではなく、積み上げられたヒューム管の底面が作っている垂直な壁の前に立ち、頭の上の方に両手を伸ばして管の内側に手をかけると、懸垂をして身体を引き上げ、上っていたのである。

テレビを見た翌日、学校で大騒ぎになったのは言うまでもない。誰もが蘭光太郎の変装を見抜けなかったことをひどく残念がったのだった。蘭光太郎は、悪漢たちだけでなく、私たち、テレビの前の善良な子どもたちをも、変装で煙に巻いたのだった。

やれやれ、また脱線してしまっただけ。七色仮面ではなく、明智と二十面相を追わなければならないのだった。

### 乱歩の仕掛けた謎

当時住んでいた家から小学校まで、子どもの足で四、五十分はかかった。今では、多摩ニュータウンにつながる大通りが真っ直ぐに延びているので、ほぼ最短距離で行けるようになったが、当時は、舗装もしていない田中の畦のような道を右に左に曲がりながらの登下校だった。

その日、私が教室に入った時、学校の近くに住む何人かはすでに登校していて、私の机の周りに集まり、なにやら大騒ぎをしている最中だった。誰かが私の姿を認めて、「ああ、来た、来た。速く、速く！」と、私が来るのを待ち望んでいたような声を上げたが、そんな風に歓迎されることは今までになかったことなのできょとんとしている、別の同級生が、「ここに出ているの、君だろ？」「やっばり江戸川乱歩の懸賞に応募したんだ！」などと言いながら騒ぎの中心にあった漫画雑誌を私の前に掲げたのである。

それは、私たちが回し読みをしていた漫画雑誌の最新号で、そこに私の名前が出ているというのである。

二、三ヶ月前の雑誌に掲載された推理漫画が懸賞クイズになっていて、それに応募したことは確かである。しかし

ながら、その当選者が、この月に発売される号に発表されると知っていたかどうか定かではない。ともかく、虫眼鏡で見なければ読めないような、小さい活字を、本人よりも先に友だちが見つけて教えてくれたのだった。

当時私たちが回し読みしていたのは、「少年」と「少年画報」だった。「少年」には、「鉄腕アトム」「鉄人28号」「矢車剣之助」など、「少年画報」には、「赤道鈴之助」「まぼろし探偵」「ビリーバック」などが連載され、男の子の心をわしづかみにしていたのだった。私は、どちらかというと「少年」派で、それは「鉄人28号」が好きだったということもあるが、附録に「実用新案！」と銘打った、組み立て式のおもちゃ（例えば、厚手の円筒形の紙で出来たロケットに、パラシュートを格納してゴムで打ち上げると、パラシュートを拡げて降りてくる、といった類の物）がついてくるのが常で、それが楽しみでもあった。

また、「少年」は、乱歩の初期の作品を連載していたからか、「少年探偵団」に関係した企画がときどき取り上げられていたように思う（これも、私が「少年」派だった一因である）。

私が応募したのも、乱歩の名前を冠したものであったと思われる。ストーリーはよく覚えていないが、ある事件に関係した犯人（それは人間ではなく大きな蜘蛛なのだが）の



潜んでいる場所を推理するというものだった。漫画の中で蜘蛛が隠れられそうな所と言えば、部屋の中に置かれていたダルマストロブしか思い当るものがなかったため、「ストロブの中です」と書いて応募したのだった。

賞は一等から三等まであって、三等がBDバッジ（探偵活動には欠かせない少年探偵団員の必携バッジ）、二等が少年探偵手帳、一等は、覚えていなかったが、最近になって調べてみて、探偵七つ道具セットだったということが分かった。私はそのうちの二等に当たったのだった。間もなく、黒のビニールカバーの手帳が送られてきたが、どうい内容のものだったか、おそらく、少年探偵になるための心得などが書かれていたと思うが、全く覚えていない。

蜘蛛の居場所をストロブの中と書いて送ったこと、当選を友だちが教えてくれたこと、そして間もなく手帳が送られてきたこと等は間違いないと思っているが、半世紀以上も前のことなので果たして記憶は正確かどうか、今さら友だちに証言を求めても何も覚えていないだろうし、物的証拠は何も残っていない・いや、一つだけある・は・は・はである。推理クイズとなった漫画が掲載されていた雑誌の号が分かれば、その数ヶ月後の当選者発表欄に、私の名前が載っているはずだから。

ところで、それは昭和何年のことだったろう。雑誌を読

はなっていない。「江戸川先生出題の探偵クイズ」という企画があり、十一月号が「指」、十二月号が「幽霊屋敷の光」、三十三年一月号が「明智探偵事務所訪問」・・・と続いているが、これらは懸賞の対象とはなっていない。その後、三十三年六月号では「江戸川先生出題の探偵パズル」という企画があるが、これも懸賞の対象にはなっていない。そして、三十四年一月号に「江戸川先生出題の探偵クイズ 恐怖の家」が登場した後、「パズル」も「クイズ」も、雑誌からは姿を消している（あと一、二ヶ月続いたのかもしれないが欠本があるので、正確なところは確認出来ていない）。

乱歩を押し立てての懸賞クイズは、月刊誌人気回復のための試みではなかったかと推測する。昭和三十年代になると、家庭にはテレビが普及しはじめ、「少年マガジン」と「少年サンデー」の週刊少年雑誌が発行されるのである。大乱歩をもつてしても、月刊誌は次第に厳しくなってきたのではないかと思うので、「少年」が昭和四十三年（一九六八年）まで発行されていたのは、光文社には申し訳ないが、意外なことだった。乱歩は、昭和四〇年（一九六五年）に他界している。

んで懸賞に葉書で応募したことだから、小学校も高学年、おそらく四、五年生以降ということになるだろう。最終的には、国会図書館に出かけ、所蔵されているバックナンバーに当たることになるが、事前に来るだけ準備を進めておこうと、国会図書館のオンラインサービスにアプローチしてみた。オンラインで見られるのは、雑誌の目次と附録のリストくらいなので、そこで私の名前の有無を確認することはできなかったが、小学四年生（昭和三十二年）という推測は、あながち見当違いではないことが分かった。

昭和三十年代前半、乱歩は雑誌「少年」のお抱え作家のような立場にいたようだ。三十一年には「魔法博士」、三十二年には「妖人ゴング」、三十三年には「夜光人間」と毎年新しい長編を執筆し、後にそれらは単行本として出版され、今でも手に入れることができる。

それに加え、彼は、雑誌のさまざまな企画にも加わっていた。その一つが「江戸川乱歩先生出題 探偵クイズ大懸賞つき」と銘打った企画で、「少年」には三十二年の夏頃から登場している。八月号が「影なきつばさ」、九月号が「霧にとけた真珠」、十月号が「死人の馬車」・・・といった具合である（昭和三十一年から、「犯人さがし大懸賞」という企画が始まっているが、江戸川乱歩先生出題と

乱歩から離れるが、「少年」のバックナンバーの目次を見て、いくつかの興味深いことに気づいた。

一つは、名の通った漫画誌ということから、後に誰もが知るヒット作を世に出す漫画家たちが、この時代から作品を発表していたということ、手塚治虫、横山光輝は先に触れたが、石森章太郎、藤子不二雄、赤塚不二夫、寺田ヒロオなどトキワ荘グループが名を連ねていることである。

漫画とともに、当時の子どもたちが熱狂していたのが野球と相撲だったことがよく分かる。その典型は、三十三年八月号で、「スポーツナンバーワン お話会」として、金田正一、長嶋茂雄、杉錦清隆という、球界と角界の第一人者を招いての座談会が組まれていること、なんだか異種格闘技のような取り合わせで、どのように話が展開したのか気になることである。同、九月号では「熱戦名古屋場所 強いぞ若乃花」「長嶋茂雄物語 打ってみせるぞ」など、毎号、野球と相撲は欠かせない話題だったようだ。

また、「少年」は漫画雑誌ではあるが、当時の社会に目を向けた企画もある。三十二、三年という、南極観測船宗谷が、越冬隊を載せて南極に向かったときである。「観測船宗谷 魔の水海をゆく」の記事や越冬隊長西堀栄三郎を招いての座談会「南極越冬隊おみやげ話 つぎにいくのはきみたちだ」の特集は、子どもたちの冒険心を刺激する

企画だった。三十三年六月号に「カラフト犬さよなら」とあるのは、この年の二月、悪天候により船への輸送が困難となつて南極に置き去りにされたカラフト犬を扱った記事と思われる。次の南極観測隊員が生き残つたタロとジロに再会するのは、三十四年一月のことである。

三十四年六月号に、「早く帰ってきてください ルバング島の日本兵」というタイトルを見つけた。不思議に思つたのは、ルバング島から帰つて来たのは小野田元少尉で、私の記憶では、彼の帰国は私の学生時代だったから、三十四年（私は小学六年生）では時期が合わないと思つたのである。調べてみると、三十年代から、フィリピンのジャングルに旧日本兵が潜んでいるというウワサがあり、接触が試みられているのだった。「早く帰ってきて・・・」は、そうした状況を反映しての特集だったようだ。そして、小野田さんが帰国したのは昭和四十九年、私が大学院生のときである。

こうした、漫画以外の記事の中でも最も興味を引かれたのは、人類学者中根千枝氏を招いての座談会、題して「首狩り族と仲よしになった ジャングルおばさんのおみやげ話」である。中根千枝と言えば、我が国を代表する人類学者の一人で、近代文明が行き届いていない土地に現地調査に赴き、研究を進めてきたことで知られている。彼女の著

#### 明智小五郎現る

新型コロナ禍がようやく収まりを見せ始めた二〇二一年秋、令和の明智小五郎は、乱歩によつて仕掛けられた謎を解明するため、国会図書館へ向かった。

この明智小五郎、現役時代には研究職と呼ばれることもある職に就いていたが、国会図書館を利用したことは一度もなかった。真面目に研究していなかったのだからと言われれば、その通りと言ふしかない。しかしながら、現役を退いてはじめて、そうした施設に調べものに行くというのも、なかなかオツなものである。

オツなのはそれだけではない。図書館では、こちらの頼んだ本を係の人が書庫から持って来てくれるものとばかり思っていたが、それは半世紀前の図書館の話だった。

昭和三十年代の雑誌を見たいと告げると、係の男性は私をコンピュータの端末が置いてあるテーブルに案内し、二、三の説明をすると、「判らないことがあつたら聞いてください」と言い残して、元いたカウンターに戻つていった。こちらとしては、言われたことを忘れないうちに、マウスを操作しながらの捜査ということになった。つまり、今や図書館では本に触ることはないのだということを知つたのもオツなことだった。

画面には、事前の準備では目次しか見られなかった雑誌

書「タテ社会の人間関係」は、ずつと私の書架にも収められていた。中根は、東大で最初の女性教授となつた人物と聞いていたが、その彼女が三十歳そこそこの、新進気鋭の研究者として世に出ようという頃、「首狩り族」は許せたとしても、「ジャングルおばさん」はないと思うものの、このような記事に触発されて、後に人類学の道に進んだ子どもがいたとすれば、貴重な特集だった。

（奇しくも、この稿の校正をしている最中に、中根氏がお逝去されたとの報道に接した。個人的な接触はなかったが、ご冥福をお祈りする。）

どうも話が横道に逸れてしまふが、明らかにすべきは、私が本当にクイズに応募し、二等に当選したのかということである。教室で友だちが教えてくれたということは、鮮明なイメージとして残っているが、後になって追加や削除それに創作されるのは記憶の常である。下調べの結果、昭和三十三年を中心に前後一年ほどの「少年」のバックナンバーを探せば、事実関係がはつきりするだろうということがわかった。しかもこの時期、「少年」では、乱歩監修による「探偵クイズ」が繰り返されていたことから、私の記憶は、かなりの信憑性があると思われるのである。

を、表紙から一ページずつ提示させることができる。実際には紙に触らないので、手も汚れないし、本も傷まない。もちろん、画面の拡大もできるので、虫眼鏡を使わなければ読めないような当選者一覧も、容易に読むことが出来る。ともかく、「江戸川乱歩先生の犯人捜し大懸賞」を中心に、それらしい企画を昭和三十一年一月号（私の小学校二年生三学期）から、しらみつぶしに調べ始めたのである。

「古城の謎」「真珠のゆくえ」「密輸船の謎」「影なきつばさ」「死人の馬車」・・・と、毎号、懸賞クイズが実施されており、数ヶ月後の号で、その解答と当選者が発表されているのは分かったが、腑に落ちないのは、どれも小説形式になっていて、私が応募した（と思っている）漫画にはなっていないのである。

三十三年十二月号まで調べたが、漫画での探偵クイズはないので、漫画というのは思い違ひだったのだろうか、今までのところで見落としたことはなかったろうか、視点を變えて、例えば、乱歩にこだわらず、あるいは他の雑誌まで範囲を拡げて見直した方がいいのではなからうかなどと自信を失いつつ、もう一年分、昭和三十四年（私の小学校六年）まで調べて、それでなかったら日を改めて・・・ということにして、一月号の「江戸川先生出題の探偵クイズ恐怖の家」を開いたのである。すると、何とそれは漫画仕

立てになっており、私が応募した探偵クイズに間違いなことが分かった（オンラインサービスで入手した目次をよく見ると、この号のみ「探偵クイズまんが 恐怖の家」となっていた）。

ストーリーは以下の通りである。

ある西洋館のお屋敷で立て続けに人が亡くなることになり、死因に不審を抱いた明智探偵と小林少年が乗り込むことになった。家の中を見せてもらおうと、地下室と上の階の部屋にダルマストープがあり、二つは煙突でつながっている。明智たちが訪れた夜、不気味な物音や声が聞こえるなどの怪奇現象が起こり、最後に巨大な蜘蛛が登場して、事件は急転直下、解決に向かう、というものであった。そして最後に、「読者諸君、蜘蛛はどこで飼われていたかを推理してください」となっている。

乱歩出題、漫画形式、蜘蛛の居場所の推理・・・私の記憶に間違いはなかった。あとは私がクイズに応募し、二等に当選したことを知らせる当選者発表を探し出せば一件落着ということになる。

しかしながら、ここに来て厄介なことに直面することになった。この頃の「少年」では、ほぼ毎号のようにいくつものクイズがあり、どれも、出題の三ヶ月後に正解と当選者発表があるというのが習わしとなっているようなのである。

つまり、一月号の当選者は四月号に掲載されることになっていてのだが、国会図書館では、この年の三、四月号は欠本になっていて見ることができないのである。念のため図書館の端末で五月号を開いてみると、二月号のクイズの当選者が載っているのが、一月号の当選者を確認するには四月号を手に入れなければならないのである。

国会図書館まで来てだめだったのだから、このまま思い出し出として残しておくことも考えたが、それだと、あと一歩のところまで追い詰めた二十面相に、どうぞお逃げくださいと言っているように思えたので、名探偵としてはそれは出来ないと考えた。身柄確保に向けて残された道としては、古書店を利用するしかないであろう。古書店と言っても、神田まで出向く必要はなく、こうした漫画雑誌を専門に扱っているインターネットのサイトを見れば済むはずである。ネット検索をしてみると、果たして、「少年」の昭和二、三十年代のバックナンバーが何冊も売りに出ていることはすぐに確認できたのだが、肝心の三十四年四月号は売り切れとなっていて、ここでも私の名前までたどり着くことはできなかった。

売り切れとなっている四月号を表示する画面に、小さく当該号の表紙と目次が出ているので、その目次の部分にカーソルを当てると、文字が拡大されて「新年号探偵クイズ

当選者発表」と読み取ることができた。しかしながら、見ることができるのは目次だけで実際の当選者発表のページまではたどることは出来ない。だからその知らせは、明智小五郎の手をまんまとかいくぐって逃げていく怪人二十面相の高笑いのように思えてならないのだった。

参考文献

- 江戸川乱歩傑作選 江戸川乱歩 新潮文庫
- 鉄塔王国の恐怖 江戸川乱歩 ポプラ社
- 塔上の奇術師 江戸川乱歩 ポプラ社
- 少年探偵団・超人ニコラ 江戸川乱歩 岩波文庫
- 怪人二十面相・青銅の魔人 江戸川乱歩 岩波文庫
- 妖怪博士（少年探偵・江戸川乱歩全集2） 江戸川乱歩 ポプラ社
- 京王線の電車・バス100年のあゆみ